

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 163 回 インターネットがテレビを超えた？ ～真実の報道とは...

2006.8.20

8月15日早朝、ついに小泉首相は靖国神社本殿参拝を実施した。任期僅かにして、本来の公約を果たしたとは本人の弁だが、各方面に大きな波紋を与えた。護国精神の象徴として軍部主導で創設された経緯と、戦後の一宗教法人としての靖国神社のあり方、A級戦犯と称する御霊の合祀、分祀と分霊の宗教上の行為、この際とばかり、外交カードすり替え論を強要する中・韓両国の利権獲得合戦、政教分離の問題等々、いやはや大変難しい問題となっており、安易に「靖国論」を展開するとやたら偉そうな勢力から糾弾されてしまう。

「靖国」の私見に関しては、以前本コラムでも述べた。(飯島賢二著『何とかしようよ、この日本』日新報道 2006.12.刊、参照)日本人としての誇りと文化を基盤にすれば、小生実は「靖国問題」、それほど複雑な問題ではないと思っている。あえて複雑にしようとする勢力に、見事なまでに攪乱されているだけの話、未だ考えとしては、全く変わっていない。

しかし今回は、別の視点からこの問題に触れてみたい。それはマスコミ報道のあり方である。当日、テレビ民放各社とも、朝5時過ぎから「小泉首相は参拝するか？」と、各地に大勢の報道陣を配備し大騒ぎしていた。参拝後の小泉首相の記者会見はNHKを見ていたが、民放はどんなコメントをするか、各社にチャンネルを回してみた。が、肝心^{かなめ}の、首相答弁に対するコメントシーンは、その直後、一社たりとも報道していなかった。

しばらくして、壇^壇を切ったように「靖国問題」の垂れ流し、しかもその論調はみな同じ。人の批判しかできない無責任評論家・政治屋、知性とは無縁顔のタレント教授、インテリぶりっ子コメンテーターと、うんざりする顔ぶれ。論調は決まって「日本に反省がない」「アジア外交を陰悪にする」「日本は謝るべきだ」つまり、「首相は靖国へ参拝すべきでない」...本当に国民はそう思っているのか？民放と言えども公共性の高いテレビが、馬鹿^{ばか}の一つ覚えの如く、こんなコメントを延々と放映し続けていた。

ほぼ同時にインターネットの世界は、別の情報を刻々と伝えていた。YAHOOの「みんなの政治」サイトは、「日本の首相が靖国神社を参拝することについてどう考えていますか？」と言うアンケートを実施。分刻みで増える投票数は、翌16日に約67,000票、うち「周辺諸国との関係、政教分離の問題はあるが控える必要がない」「特に問題ない」合わせて83%を超えており、「理由を問わず控えるべき」はわずか8%という結果になっている。

意図的思想を強要する虚構の巨星、テレビ最後の良心であった「報道」も地に墮^おちた。真実を曲げ国民の本意を伝えず、自虐的日本思想を押し付け、まるで韓国や中国を代弁するが如くのテレビ界に、国民はどこまで着いていくだろうか？真実そのままを瞬時に報道するインターネット、決して偏^{かたよ}った意見に固持しない姿勢が国民に支持され、「報道」という分野においてもテレビを圧巻する日は近いかもしれない。業界猛反省！！すべきかも。